

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』への百科事典的な注解の試み-第9エピソード(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8973

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』
への百科事典的な注解の試み

—第9エピソード(2)

小川美彦

略号表

- A** W. B. Yeats: *Autobiographies*. London, 1956.
- AIU** Weldon Thornton: *Allusions in Ulysses*. An Annotated List
Chapel Hill, 1968.
- ASD** (Ed.) Elizabeth Preston & Christmas Humphreys: An Abridge-
ment of *The Secret Doctrine*. London, 1966.
- BMW** Annie Besant: H. P. Blavatsky and the Masters of Wisdom.
London, 1962.
- CCHS** A Catholic Commentary on Holy Scripture. Edinburgh, 1960.
- DAB** The Dictionary of American Biography. 23 Vols. N. Y., 1933.
- DPF** E. Cobham Brewer: *A Dictionary of Phrase and Fable*. New
Ed. London, n. d.
- EO** Lewis Spence: *An Encyclopaedia of Occultism*. N. Y., 1960.
- ET** A. Cohen: *Everyman's Talmud*. London, 1949.
- GB** James George Frazer: *The Golden Bough. A Study in Magic
and Religion*. 3rd Ed. 13 Vols. London, 1951.
- JJ** Richard Ellmann: *James Joyce*. N. Y., 1959.

- KT** H. P. Blavatsky : The Key to Theosophy. Pasadena, 1946.
- LII** (Ed.) Richard Ellmann : Letters of James Joyce. Vol. II. London, 1966.
- LAE** (Ed.) Alan Denson : Letters from AE. London, 1961.
- LR 5 : 12** James Joyce : Ulysses. Episode IX. (*The Little Review*. Vol. V, No. 12. April, 1919.)
- LY** (Ed.) Allan Wade : The Letters of W. B. Yeats. London, 1954.
- OAB** The Oxford Annotated Bible with the Apocrypha. Revised Standard Version. N. Y., 1965.
- ODCC** (Ed.) F. L. Cross : The Oxford Dictionary of the Christian Church. London, 1958.
- OED** The Oxford English Dictionary. 13 Vols.
- OMO** Cyril Scott : An Outline of Modern Occultism. Revised Ed. London, 1949.
- PI** Heinrich Zimmer : Philosophies of India. Meridian Books. N. Y., 1958.
- PWR** (Ed.) Alan Denson : Printed Writings by George W. Russell. A Bibliography. Evanston, Illinois, 1961.
- RHDEL** The Random House Dictionary of the English Language.
- SED** A Sanskrit-English Dictionary. Oxford, 1970.
- SOED** A Supplement to the Oxford English Dictionary. Vol. I. Oxford, 1972.
- SR** The Small Ritual. London, 1956.
- TG** H. P. Blavatsky : The Theosophical Glossary. Los Angeles, 1966.
- TM** The Theosophical Movement. 1875—1950. Los Angeles. 1951.
- U** James Joyce : Ulysses. A New Ed. London, The Bodley Head, 1962 ; A New Ed. N. Y., The Modern Library, 1961.
- Us** James Joyce : Ulysse. Paris, 1952.

- W.I.D** Webster's New International Dictionary. 2nd Ed.
WTNID Webster's Third New International Dictionary.
Y Joseph Hone: W. B. Yeats. London, 1962.
YMM Richard Ellmann: W. B. Yeats. *The Man and the Mask*.
 London, 1961.
インド 中村元『インド思想史』第2版 1973年 岩波書店
原キ 荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』1971年 岩波書店
東思1 『講座東洋思想1 インド思想』1972年 東京大学出版会
仏辞 宇井伯寿監修『コンサイス仏教辞典』昭和28年 東成出版社
明大教養46 小川美彦『A. E. と The Hermetic Society』(明治大学教養論集
 第46号 1968年12月)
明大教養65 小川美彦『ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」への百科事典
 的な注解の試み——第9エピソード(1)』(明治大学教養論集第65
 号 1971年4月)

× × × × × ×

237.14/185.33 **Dunlop**

=Daniel Nicol Dunlop (1868—1935)。スコットランド南西部の Ayr 郡
 の生まれ。おなじ郡の Ardrossan で中等教育を終え、のち1890年 Dublin
 に転居、市内で紅茶、葡萄酒商をいとなむかたわら The Dublin Lodge
 of the Theosophical Society [明大教養46 pp.93 ff. 参照] に加入、翌91年
 4月には、A. E. [Ibid. pp.83 ff. 参照] や Eglinton [明大教養65 pp.18-9参
 照] の兄 Hamilton Malcolm Magee [Ibid., p.18 参照] らとともに、Frederick
 J. Dick 夫妻を中心に神智教徒たちによる共同生活を始める [明大教養46 p.
 94 参照]。翌92年10月から、神智教会ダブリン支部の機関誌 *The Irish Theo-
 sophist* [月刊] を編集発行 [97年9月号をもって終刊]。同年末か翌年の
 はじめに結婚、同時に市近郊の妻君の実家に移転。97年秋アメリカに渡り、
 The Point Loma Theosophists [ポイント・ロウマは California 州南端、
 San Diego に近い半島、およびそこにある町] の主宰者 Katherine Augusta

Westcott Tingley (1847—1929) [Ibid., p. 95 参照] の秘書になったが間もなく解雇。99年ロンドンに帰り、British Westinghouse Electric and Manufacturing Co. のロンドン営業所宣伝部勤務。のち1911年、The British Electrical and Allied Manufacturers' Association の初代理事長〔連盟には Charles A. Weekes (明大教養65 p. 18 参照) も顧問として参加〕。24年、第1回 World Power Conference を招集、以後この会議には毎年世界49か国の技術者や科学者が参集した。

彼には神智教関係の著書が数点あるほか、おなじ関係の雑誌の編集などにもたびたびたずさわった。例えばすでに述べた *The Irish Theosophist* のほかに、イギリスの劇作家、詩人の Clifford Bax (1886—1962) とともに、不定期の *Transactions of the Theosophical Art Circle* (1907年12月—1908年6月)、およびその後身の *Orpheus* (1908年10月—1914年4月) を共同編集した。そして20年代に Rudolf Steiner (1861—1925) の Der anthroposophische Bund (1912年結成) のメンバーになり、のち同教団イギリス支部事務総長になった [LAE pp. xxxii, 249-50, 274 & PWR pp. 128, 149]。

1902年10月に University College [明大教養65 p. 9 参照] を卒業したジョイスは一時 The Catholic University School of Medicine [Ibid., p. 17 参照] で医学の勉強を志した。だが、ひとつには経済的な理由から、またもうひとつにはジョイス特有の被害妄想からパリへの遊学を決意、生活の資をうるために、1903年1月中旬にロンドンでイエイツに将来の *Men and Women* の編集者ダンロップに紹介してもらった。この週刊誌は同年3月からの発行予定であり、ジョイスはこの雑誌のバリ通信員ということで原稿を送ったりもしたが、けっきょくは雑誌自体が計画倒れで、沙汰やみに終わらしい [LI pp. 24-5, 31, 37 & JJ pp. 124, 125]。

ところで、なぜスティーヴンはエイ・イーが関係していた神智教会ダブリン支部のメンバーとして最初にダンロップを連想したのであろうか？ その理由として考えられるのは、①すでに触れたように、彼はダブリン支部の機関誌を編集するほど支部では重要な人物であり、②エイ・イーとはきわめて

親しい間柄にあり〔エイ・イーはチャールズ・ウィークス宛の手紙で、いつも彼のことを“Dan”と呼んでいる (LAE pp. 72, 99 & 204)。また、彼が不在中はエイ・イーが機関誌の編集を代行した (Ibid., p. 16)〕, ③さきに述べたように、彼が作者ジョイスとなんらかの関係があった数少い神智教徒のひとりであるということ, などが挙げられる。

237.14/185.33 Judge, the noblest Roman of them all

Thornton は *The Irish Theosophist* [前注参照] のバックナンバーから、神智教会ダブリン支部のメンバーとして William J. Judge なる名前を拾い出している [AIU p. 156]。だが、もしこのような人物が実在していたとしても、ぼくたちが調べたかぎりでは、エイ・イーをはじめとするダブリン支部の中心的なメンバーと特別な関係があったとは考えられない。ここはもちろん以下にぼくたちが述べる理由から、ダブリン生まれのアメリカの弁護士で、神智教会の首脳者のひとり William Quan Judge (1851—96) のこと。

彼は少年時代から神秘思想に傾倒し、母親の死後父とともにアメリカに移住 (1864)、法律を学び、弁護士になる (1872)。Colonel Henry Steel Olcott (1832—1907) [明大教養46 p. 95 & p. 103, n. 32 参照] の紹介で Madame Blavatsky [明大教養65 p. 51 参照] を識り、彼らとともに神智教会の創設に参画 (1875)、女史と大佐がインドへ出かけたのちの分裂したニューヨークの支部を再建、The Aryan Theosophical Society と改称、その会長になる (1783)。以後各州の代表的な都市に支部を設立、機関誌 *The Path* を発行した。

ブラヴァツキ女史の死後 [1891年死亡]、はじめジャッジを支持して、彼を次期会長とまで目していたロンドン神智教会 [ヨーロッパ本部] の責任者 Annie Besant (1847—1933) が、94年2月、ジャッジが受けとったチベットの導師からのご託宣だと称する文書は実は偽造だと告発し、それをうけた“President-Founder”のオールコット大佐がただちに副会長のジャッジの辞職を勧告して以来、オールコット=ベサント派とジャッジ派との間に深刻

な対立がもちあがった。けっきょくはこれを機に、神智教会は真二つに分裂
〔ヨーロッパ＝インド (Madras 近郊の小村 Adyar にインド本部がある)
派 Vs アメリカ派〕、以後はジャッジはアメリカにおける教団の代表者とし
て相も変わらず重きをなした〔死亡当時40万の信者がいたといわれる〕。死後
キャサリン・ティングリ女史〔前注参照〕がその意志をついだ〔DAB X
p. 233, TM pp. 29, et al & LAE p. 14, n. 3〕。彼には *Echoes from the
Orient* (1890), *The Ocean of Theosophy* (1893) などの神智学およびイン
ド関係の著書が多数ある。

エイ・イーは1894年7月にロンドンで開催されたヨーロッパ神智教会の年
次総会で会って以来、ジャッジに対しては英雄崇拝に類するような感情を抱
き、同年10月にロンドンの *Westminster Gazette* が、例の偽造事件をすっ
ぱぬいた、イギリス生まれの(旧)英領南アフリカの政治家、ジャーナリスト、
文筆家 Fyde Edmund Garrett (1865—1907) の *Isis Very Much Unveiled:
the Story of the Great Mahatma Hoax* と題する記事を連載して物議をか
もしてのちも、終始彼を支持し続けた。例えば1894年9月6日づけの Caroline
Clements Rea (1865—1954) 宛の手紙では、“a man whom I consider the
wisest and sweetest of any I have met W. Q. Judge”〔LAE p. 14. ア
ンダーライン筆者〕といているし、またジャッジの死後25年たった1922
年10月にも、“that great and wise man, William Q. Judge whose very
memory seems to have been forgotten by present day Theosophists.
I think he was a true adept in that sacred lore and I have never found
in those who came after H. P. B. [i. e. Helena Petrovna Blavatsky] and
Judge the same knowledge, wisdom and inner light.”〔Ibid., p. 157〕と書
いている〔B. P. Wadia 宛の手紙〕。

ところで本文の“the noblest Roman of them all”という句であるが、
これはシェイクスピアの *Julius Cæsar*, V, v で、天下を得た Antonius が
敵ながらあっぱれな Brutus の死を悼んだ幕ぎれのせりふからの引用——

Ant. This was the noblest Roman of them all :
All the conspirators save only he
Did that [=what] they did in envy of great Cæsar ;
He only, in a general honest thought
And common good to all, made one of them.

[ll. 68-72]

もちろんいま問題にしている『ジュリアス・シーザ』からの句は、すでに引用したエイ・イーの書簡からもわかるように、彼の英雄崇拜を知ったうえでの揶揄。もっとも、エイ・イーの私信の文句については当事者以外は知りうべくもないが、おそらくジョイスは、エイ・イーがジャッジのことでおなじようなことをいっているのをどこかで読むか、あるいは聞かしたのであろう。なお、イエイツはジャッジに対してはエイ・イーとまったく反対の評価をくだし、例の暴露記事が出たときには、“Many thanks for the *Westminster*. I am in many ways glad the Judge row has broken out, as I have disliked and suspected the man for years.” [LY p. 236] [1894年11月5日づけの父親 John Butler Yeats (1839—1922) 宛の手紙] と文字通りの快哉を叫び、またあいかかわらずの “his hero-worship of Judge” [Ibid., p. 345] に対して、いまさらながらエイ・イーの眼識力の欠除を嘆いている [1900年6月2日づけの Lady Augusta Gregory (1852—1932) 宛の手紙]。

すでに述べたように、ダンロップは例の偽造事件ののちもエイ・イーの意向をうけてジャッジを支持し続けた神智教会 ダブリン支部 [明大教養46 pp. 95, 100-1 参照] の機関誌の編集者であり、また1896年にジャッジが死亡したとき、同誌にエイ・イーの熱烈な追悼詩文を掲載した [LAE p. 14, n. 3 & PWR p. 127] 直接の責任者でもあるので、スティーヴンの連想もダンロップ→ジャッジ→当のエイ・イーときわめて自然に発展してゆく。

この大文字の “Arval” については WNID のつぎの記述を参照のこと——

Arval, *adj.* [L. *arvalis* pertaining to *arvum* cultivated land.] *Rom. Relig.* Designating, or pertaining to, a body of priests, nominally twelve [i. e. “with reference to the twelve months of the old lunar year” (GB Vol. IX, p. 232)], called *Fratres Arvales* (Arval Brethren or Brothers). They presided over an annual festival in May [i. e. on three days in May, on the 1st and 3rd in Rome, on the 2nd in the sacred grove of the goddess Dea Dia on the Via Campana, 5 miles from Rome], identified by them with the ancient **Ambarvalia** and dedicated to **Dea Dia**, probably a local form of Ceres [i. e. an ancient Italian corn-goddess, commonly identified in antiquity with Demeter]. The *suovetaurilia* [i. e. a sacrifice consisting of a boar, a ram, and a bull, or to female deities the female animals, esp. at lustrations] were offered for the lustration of the fields and to secure increase of fruits.

以上の説明から “Arval” が、宇宙の生命的な創造力の母胎である母なる大地の崇拝者であり、*esoteric* な自然哲学者であるばかりでなく、現に毎日のように大地に接し直接その恩恵にあずかる農民たちの生産を高め、さらには彼らの生活を精神的にもより豊かなものにするために、農業協同組合運動を積極的におし進めているエイ・イー [明大教養46 pp.95-6 参照] にきわめてふさわしい称号であることは明らかである。なおこの称号は、ローマにちなんで、Judge の修飾句として用いられた “the noblest Roman of them all” からごく自然に導き出された。

237. 15/185. 34 **the Name Ineffable, in heaven hight, K. H., their master, whose identity is no secret to adepts**

まず “the Name Ineffable” であるが、この句でぼくたちがすぐ連想す

るのは Jehovah の名前を示す4文字、つまり Tetragrammaton のことである。そしてこの連想が正しいことは DPF の “*the ineffable name, the name (among the Jews, Jehovah) that was not to be uttered*” [p.19] という記述によって証明される。そこでつぎに ET をみると、“The Ineffable Name” と題する節につきのような説明がみられる——

To the Oriental, a name is not merely a label as with us. It was thought of as indicating the nature of the person or object by whom it was borne. For that reason special reverence attached to ‘the distinctive Name’ (*Shem Hamephorash*) of the Deity which He had revealed to the people of Israel, viz. the tetragrammaton, JHVH.

In the Biblical period there seems to have been no scruple against its use in daily speech.... But in the early Rabbinic period the pronunciation of the Name was restricted to the Temple service. The rule was laid down: ‘In the Sanctuary the Name was pronounced as written; but beyond its confines a substituted Name was employed’ (Sot. VII. 6)....

In the last stage of the Temple’s existence [i. e. The Second Temple of Solomon was utterly destroyed by the Roman army in A. D. 70], there was reluctance to give a clear enunciation of the tetragrammaton....

Behind the care not to give explicit utterance to the Name may be detected a lowering in the moral standard of the priests. The Talmud declares: ‘At first the High Priest used to proclaim the Name in a loud voice; but when dissolute men multiplied, he proclaimed it in a low tone’ (p. Joma 40 d)....

Instead of JHVH the Name was pronounced *Adonai* (my Lord) in the Synagogue service; but there is a tradition that the original pronunciation was transmitted by the Sages to their disciples periodically——once or twice every seven years (Kid. 71 a). Even that practice ceased after

a while, and the method of pronouncing the Name is no longer known with certainty.

[pp. 24-6]

いまやぼくたちは、“the Name Ineffable”が普通エホバとの関係で使われる名称であることを知った。だが、ブラヴァツキ女史がいみじくもいっているように、“That the Oriental Occultists have their own “Ineffable name” it is hardly necessary to repeat.” [TG p.156] のであって、ステューヴンがしたように、この名称をあつで触れる K. H. に冠することも可能である。なぜなら、一般に神智教会では“God on earth” [TM p.176] である問題の Adept [仏教でいう「阿羅漢」,ないしは道教でいう「道士」にあたる。詳しくは以下を参照のこと] を “the Master” という称号だけで呼び、彼をほかの Master から区別する場合にも、せいぜい “Master K. H.” とか、“Mahatma K. H.” というふうに頭文字だけで呼ぶのが普通だからである。これはおそらく畏敬の念に由来するのであって、神智教徒でもブラヴァツキ女史だけは H. P. B. と頭文字で呼ぶのと同様である。もちろん、ステューヴンが K. H. をエホバなみにこのようなもったいらしい名称で呼ぶこと自体がそれを揶揄することをねらっているわけだが、彼はそれに輪をかけて、“ineffable” という形容詞を普通とは違って、名詞のうしろから修飾させている。

つぎに “in heaven hight” という句であるが、これは *Job 22:12* から出ている——

Is not God in the height of heaven? and behold the height of the stars, how high they are!

もちろん、アンダーラインの句の転用。

なお、この句は “the Name Ineffable” という名称から自然に連想されたもので、さきに指摘した揶揄の効果を高めるのに役立っている。

さて、本来ならばつぎにぼくたちがとり上げなければならないのは問題の“K. H.”である。だが、論をすすめる都合上、ここでは順序を逆にしてあとから言及される“adept”をまず問題にすることにする。すなわち、神智教会でいう“Adepts”とは――

men who after stern self-denial and by means of consistent self-development, have fitted themselves to assist in the ruling of the world. The means by which this position is attained is said to be long and arduous, but in the end the successful one has fulfilled the purpose for which he was created and transcends his fellows. The activities of *Adepts* are multifarious, being concerned with the direction and guidance of the activities of the rest of mankind. Their knowledge, like their powers, say Theosophists, far exceeds that of man, and they can control forces both in the spiritual and the physical realm, and are said to be able to prolong their lives for centuries. They are also known as the Great White Brotherhood, Rishis [i. e. Rishi=(Skr. ṛṣi) holy sage. 「仙(人)」], Rahats [i. e. the same as “Arhat(s)”=Skr., lit., deserving (respect). (音訳)「阿羅漢」, (意識)「^{あつ}「^ん」」], or Mahatmas [i. e. Mahātmā=Skr. mahātman, lit., great-souled, wise. fr. *mahat* great+*ātman* soul. 「大自性, 最第一」]. Those who earnestly desire to work for the betterment of the world may become apprentices or *chelas* to *Adepts*, in which case the latter are known as “masters,” but the apprentice must first have practised self-denial and self-development in order to become sufficiently worthy. The master imparts teaching and wisdom otherwise unattainable, and helps the apprentice by communion and inspiration. Madame Blavatsky alleged that she was the apprentice of these masters, and claimed that they dwelt in the Tibetan Mountains.

[EO p. 3]

以上の説明から、すでに触れた“Master”〔仏教でいう「阿闍梨」,あるいは「導師」(=人を導いて正道に趣かしむる者の意。仏・菩薩の通称。仏辞 p.786) にあたる。ただし、体系のちがうふたつの宗教を混同することは避けなければならないが〕とか“Mahatma”というような称号の由来もわかってくる。

さて、問題の“K. H.”であるが、これはイエイツがブラヴァツキ女史をロンドンにたずねたとき、その肖像画が入口のドアのところにかかっていたという彼女のふたりの導師 [A p.176] のうちのひとり Koot-Hoomi のこと [もうひとりには Morya という (YMM p.59)]。この人物がとくに有名になったのはもちろんブラヴァツキ女史との関係からであるが、それも主として、イギリスのジャーナリストで、のちに神智教徒になった Alfred Percy Sinnett (1840—1921) が女史にまつわるさまざまな不可思議な出来事や、彼女の仲介によって自分が実際にこの道士と交渉をもった体験を、その著 *The Occult World* (1881) で公表したからである [BMW p. 11 & TM pp. 62 ff.]。彼は女史やシネットらと連絡をとるために、道士特有の超人間的な霊力によってしばしば遠隔の地に肉筆の手紙を運び、またときには実際の肉体をそなえた人物として姿を現わして、みずから手紙を置いてゆくのであった。イエイツの自伝にも、腹をきり開いた生きた犬で膝をくるんで、女史の脚をなおした話や、用があるときに鳴らす“astral bell” のことなどが報告されている [A pp. 176 & 178]。

なお、Koot-Hoomi という名前 [その語源的な由来は不明] のことであるが、これは“...I have personal and absolute knowledge of the existence of the Mahatma, who has corresponded with Mr Sinnett, and is known to the Western world as ‘Koot Hoomi.’” [BMW p. 16] という Mohini Mohun Chatterji [彼自身がよく Koot-Hoomi の代理として各地の神智教会の支部に派遣されたい。Cf. Y p. 48, n. 1 & 明大教養46 p. 93] の言葉から判断すると、どうやらブラヴァツキ女史あたりが便宜的につけた名前のようである。

さて、最後にぼくたちが問題にしなければならないのは、本文の “their master, whose identity is no secret to adepts” のところである。すなわち、この “their” はもちろん Dunlop, Judge, A. E. をさし、さきに引用した説明から、彼等がみな導師 K. H. の “chela” であることは明白である。だが、それ以下の文は K. H. 自身が “adept” であることを考えると、一見いかにもあたり前のことをいっていて、つぎのセンテンスの出だしの句 “brothers of the great white lodge” との関連から、もっぱら “adepts” という語を挿入するための操作ではないかと疑いたくなる。だが、このような疑問が起るのはぼくたちが Adept の実際に通じていないからで、ブラヴァツキ女史の——

To offer oneself as a candidate for Chelaship is easy enough, to develop into an Adept, the most difficult task any man could possibly undertake. There are scores of “natural-born” poets, mathematicians, mechanics, statesmen, etc., but a natural-born Adept is something practically impossible. For, though we do hear at very rare intervals of one who has an extraordinary innate capacity for the acquisition of occult knowledge and power, yet even he has to pass the self-same tests and probations, and go through the same self-training as any less endowed fellow aspirant. In this matter it is most true that there is no royal road by which favorites may travel.

For centuries the selection of Chelas—outside the hereditary group within the *gon-pa* (temple)—has been made by the Himalayan Mahatmas themselves from among the class—in Tibet, a considerable one as to number—of natural mystics. The only exceptions have been in the cases of Western men like [Robert] Fludd [i. e. (1574—1637), English physician and Rosicrucian], Thomas Vaughan [i. e. (1622—66), Welsh alchemist and poet. Twin-brother of Henry V. (1622—95), one of

“the Metaphysical Poets”), [Philippus Aureolus] Paracelsus [i.e. (1493 ?—1541), Swiss physician and alchemist], [Giovanni] Pico di [*sic*] Mirandola [i. e. (1463—94), Italian philosopher], Count [de] St. [-] Germain [i. e. (1710 ?—84), French adventurer], etc., whose temperamental affinity to this celestial science more or less forced the distant Adepts to come into personal relations with them, and enabled them to get such small (or large) proportion of the whole truth as was possible under their social surroundings.

[TM p. 137]

という説明を読めば、おのずからその疑念も晴れるであろう。

すなわち、道士とその使徒とでは靈的能力において格段の差違があり、たとえ使徒が修業をつみ、靈的能力がますにつれて、導師の姿が“visions”→“his astral form”→“his own physical body” [BMW p. 13] として見えるようになり、ついには“hold an intercourse for over an hour with my Master” [Ibid., p. 15] というようなことが可能になるにしても、使徒はあくまでも使徒以上ではないのであって、彼等にあってはせいぜい導師の一斑をうかがいうるにすぎないのである。もちろん、使徒である以上はブラヴァツキ女史も、さきに言及したモヒニ・チャタジも例外ではないのだ。

以上のような理由から、ぼくたちが疑問をさしはさんだ個所はけっして駄足でもなく、またたんなる技法上の措置でもなく、むしろある程度まで“the Name Ineffable, in heaven high”という修飾語句の妥当性を裏書きするのであって、問題の個所も“his master, whose identity is secret to all but adepts”の意に解すべきであろう。

なお、この項の説明に出てきた“astral bell”,あるいは“astral form”について一言すると、ここの“astral”はastral body [幽体]とかastral world [幽界]とかいう場合と同様の用法で、SOEDによると、このように説明されている——

Theosophy. Pertaining to or consisting of a supersensible substance considered to be next above the sensible world in refinement and held to pervade all space.

ではこの知覚されうる現実界に直接接触する超感覚的な物質界、つまり幽界とはどんな世界かというところ——

Astral World (Plane or Sphere): Kama World is, in Theosophy, the second lowest of the seven worlds, the world of emotions, desires, and passions. Into it man passes at physical death, and there he functions for periods which vary with the state of his development... The appropriate body is the *astral*, which though composed of matter as is the physical body, is nevertheless of a texture vastly finer than the latter. Though it is in its aspect of the after-death abode that this world is of most importance and most interest, it may be said in passing, that even during physical life, man—not only clairvoyants who attain it easily, but also ordinary men—may and do temporarily inhabit it. This happens during sleep, or by reason of the action of anæsthetics or drugs, or accidents, and the interpenetrating astral body then leaves its denser physical neighbour, and taking with it the sense of pleasure and pain, lives for a short time in its own world.

[EO pp. 41-2]

したがってこの説明によると、“astral bell”も“astral form”もともに幽界物質でできた超感覚的な物体であって、この世界特有の純粋な欲望や意志を、超能力者間において、充足し達成するための媒体だということができる。

237.16/185.35 **brothers of the great white lodge**

すでにみてきたように、倫理的にも道徳的にも、人間として最高度に進化発展した知能の持主である Adept は、霊界の支配者として、人間の精神的な開発発展を援助し、指導する立場にある。このような Adept の社会、つまり “Hierarchy of Adepts which constitutes the inner Government of our world” [OMO p. 69] を the Great White Lodge といい、また the Great White Brotherhood [前注の引用文参照] ともいうのである。ただし、“Its members do not dwell together, but live separately apart from the world and are in constant communication with one another and with their head. Their knowledge of higher forces is so great that they have no necessity for meeting in the physical world, but each dwells in his own country, and their power remains unsuspected among those who live near them.” [EO p. 411] なのであり、また “These adepts are willing to take as apprentices those who have resolved to devote themselves utterly to the service of mankind, and anyone who may attract their attention by showing himself worthy of their notice.” [Ibid.] すなわち、スティーヴンが “Brothers of the great white lodge always watching to see if they can help.” というゆえんである。

237.18/185.36 **The Christ with the bridesister, moisture of light, born of an ensouled virgin, repentant sophia, departed to the plane of buddhi.**

このきわめて eclectic な謎めいた神学を解明するためには、まず最後の “buddhi” [「覚」] の検討からはいるのが適当であろう。この語についての SED の定義をみると――

the power of forming and retaining conceptions and general notions, intelligence, reason, intellect, mind, discernment, judgment

とあって、全般的な知的な能力ないしは機能を意味している。ところがこのように buddhi 1 語に含まれる全精神的な機能は、およそぼくたちの意識的な意志の支配を受けないがゆえに、buddhi は自我意識に先行し、またそれを越える機能であることがわかる。すなわち、それはぼくたちの意識作用を越えた、生まれながらの直観的な認識力であるということができなのだ。この点に着目したのがインドの正統バラモン系統のサーンキヤ学派やヨーガ学派である。彼等にとっては、“Buddhi comprises the totality of our emotional and intellectual possibilities. These stand in store—beyond, and as the background of, our ego-function. They constitute that total nature which is continually becoming conscious (i. e. manifest to our ego) through all the acts denoted by the term buddhi. As a great reservoir of the permanent raw-materials of our nature, which are continually presented to consciousness and the ego-function from within, buddhi is manifold in its products and utterances, wonderful in its all-inclusiveness; that is why it is termed “The Great One,” “*mahan.*”

[PI pp. 320-1] であって、WTNID の “buddhi” の説明——“the faculty of intuitive discernment or direct spiritual awareness in beliefs of Hinduism and Buddhism” や RHDEL の定義——“Intellect, seen as an intuitive faculty giving increased spiritual awareness” は、このサーンキヤ系統の見解を反映している。

だが、ここで注意しなければならないのは、彼らはあくまでも buddhi を「純物質的なもので、身体の中の一機官」[インド p. 140 & 東思 1 p. 112] だと見做し、永遠なる実在としての純粹精神、つまり puruṣa ないしは ātman とは峻別して考えていたということである。したがって彼らにあっては、「純粹精神それ自体は常住不変で純粹清浄であり、生も死も、輪廻も解脱もすべて純粹精神そのものには本質的な関係はない」[東思 1 p. 111]。むしろそれらは、Thomas Aquinas (1225?—74) のいわゆる *materia prima* (第1質料)、つまり根本的な質料因である *prakṛti* のほうに起ると考えられていた

のである。

以上ぼくたちは“buddhi”の内包をめぐって、主としてサーンキヤ学派の見解を参考に、WTNID や RHDEL の定義の根拠をさぐってきたのであるが、ここでさらにもうひとつ、WNID の定義を検討することにしよう。なぜなら、そこには他の辞書とは違って、きわめて特殊な、ある特定の思想的な背景を指向していると思われる説明が加えられているからである。すなわち、WNID では、buddhi の説明として――

Hinduism The soul, or discernment, constituting with atman and manas the trinity of elements comprised in the immortal being of man

とある。

この定義はすでにみてきたように、WTNID では姿を消し、全面的な改訂が行なわれたわけだが、この事実がかえって、その定義にもられた思想的な特殊性を暗示しているのだ。そしてぼくたちがつぎに引用するブラヴァツキ女史の解説と比較考量するならば、その両者のあまりにも見事な吻合に一驚せざるをえないであろう。すなわち女史は、あとから問題にする“Christos”に関連してこういっている――

One often finds in Theosophical writings conflicting statements about the Christos principle in man. Some call it the sixth principle (*Buddhi*), others the seventh (*Atman*).... We say that Christos is not only one of the three higher principles, but all the three regarded as a Trinity. This Trinity represents the Holy Ghost, the Father, and the Son, as it answers to abstract spirit, differentiated spirit, and embodied spirit. Krishna and Christ are philosophically the same principle under its triple aspect of manifestation. In *Bhagavatgita* (*sic*) we find Krishna calling himself indifferently Atman, the abstract Spirit, Kshetragna (*sic*), the Higher or

reincarnating Ego, and the Universal Self, all names which, when transferred from Universe to man, answer to *Atma*, *Buddhi*, and *Manas*.

[KT pp. 67-8, n.]

では、Atman, Buddhi, Manas を “the immortal spiritual Triad” [ASD pp. 106-7] とみる神智学や WNID の見解はインド哲学とはどのようなかわりにあるのであろうか。この点については、うへの引用文でブラヴァツキ女史が言及している *Bhagavad-Gītā* と比較するのが適当であろう。

『バガヴァッド・ギーター』は後代のヒンドゥー教徒がもっとも重んじ、愛唱する聖典で、日本よりも欧米においてとくに注目されてきた。そして、そこにはすでに触れたサーンキヤ学派の影響も見られるが、他方においては、ウパニシャッド系統の特色もよく示している。したがって絶対者 atman も超越的であるとともに内在的であり、純粹精神である puruṣa の個性化がおこなわれて、kṣetrajña [個我] という概念が想定される。例えば『バガヴァッド・ギーター』の第3章で Kṛṣṇa は解脱を得る方法についてこういっている——

The higher intelligence (*jñāna*) of man—who is intrinsically endowed with perfect insight (*jñānin*)——is enveloped by this eternal fiend Desire [i. e. *kāma*], which assumes all possible forms at will and is an insatiable conflagration. The sense-forces (*indriyāni*), the mind (*manas*), and the faculty of intuitive awareness (*buddhi*), are all said to be its abode. Through these it bewilders and confuses the Owner of the Body [i. e. *kṣetrajña*], veiling his higher understanding. Therefore begin by curbing the sense organs and slay this Evil One, the destroyer of wisdom (*jñāna*) and realization (*vijñāna*). The sense-forces are superior [to the physical body]; the mind is superior to the senses; intuitive under-

standing again is superior to the mind ; superior to intuitive understanding is He [*sa*: the Owner of the Body, the Self]. Therefore, having awakened to the fact that He is beyond and superior to the sphere of intuitive understanding, firmly stabilize the Self by the Self [or thyself through the Self], and slay the fiend who has the form of desire [or who takes whatever shapes he likes] and who is difficult to overcome.

[PI pp. 402-3]

この文と前に引用したブラヴァツキ女史の文章とを比較してみると、神智学のいわゆる“trinity”が『バガヴァッド・ギーター』で説かれる精神構造に立脚しながらも、かならずしもそれに拘泥せずに、むしろそれを自由を利用して解釈しなおしていることがわかるであろう。すなわちブラヴァツキ女史によると、“abstract spirit”である“the Holy Ghost”は、もちろんインド哲学の“*Atman*”ないしは“*Atma*”[i. e. “the inseparable ray of the Universal and One Self (= *Atman*) (KT p. 175)]にあたり、“embodied spirit”である“the Son”は“the Higher or reincarnating Ego”である“*Kshetrajna*”, つまり“*Manas*”[i. e. “the Higher Ego, or the sentient reincarnating Principle in man” (TG p. 202) & “*Manas* is also called *Kshetrajna*” (KT p. 135, n.)] にあたり、また“differentiated spirit”である“the Father”は“the Universal Self”である“*Buddhi*”に相当し、この3者を総合的に“*Christos*”と呼ぶというのである。

ただこの場合、最後の“*Buddhi*”については疑問があり、KTの他の個所でおこなわれているブラヴァツキ女史の説明によると、“the Universal Self”は“*Buddhi*”ではなく、むしろ“*Atman*”のことでなければならないことになる。なぜなら、女史は Self と Ego とが神智教徒の間でもしばしば混同して使われることをいましめて、Self は“the One universal Self”, つまり *Atman* に関してのみ用いられるべきだと主張し、つづいて“Speaking of *Manas*, the “causal body,” we may call it—when connecting

it with the Buddhist radiance—the “**Higher Ego,**” never the “**Higher Self.**” For even *Buddhi*, the “**Spiritual Soul,**” is not the **Self**, but the vehicle only of **Self.**” [p. 174] といっているからである。だがまた, “**Atman** is the Universal **All**, and becomes the **Higher-Self** of man only in conjunction with *Buddhi*, its vehicle, which links it to the individuality (or divine man)” [Ibid., p. 121. Cf. Index, p. 4] や “the “**HIGHER SFLF**” which is *Atma*, the God within us, and inseparable from the Universal Spirit [i. e. *Atman*. See TG p. 43]” という記述からすると, “the Universal Self” というのは前述の “the One universal Self” ではなく, むしろ “Higher Self” のことで, したがってそれは, *Atma* ないしは精確には *Atma-Buddhi* のことにほかならないから, “abstract spirit” である *Atman* と区別して, 便宜的に “*Buddhi*” と称したとも考えられる。

さてこのような名辞上の混乱は, 神智学のように本来 eclectic で, 諸宗教の統一をめざす宗教においてはあり勝ちなことであろうが, それはさておき, 本題の神智学でいう “*Buddhi*” とはいかなる精神的な機能を意味するのであろうか。この問いに答えるためには, *Buddhi* の性格上, どうしても例の “the immortal spiritual Triad” との関連において論をすすめる必要がある。ここではまず *Atman* から考察に入ることにしよう。

神智学の *Atman* は, 伝統的なウパニシャッドの中心思想である *Brahman* と *Atman* との一体 (梵我一如) 説や, 大乘仏教の仏陀観とは違って, むしろヘブライの *Kabbala* の影響を受け, 相対界とまったく隔絶した無規定, 無属性の超絶的な最高原理と考えられている。すなわち——

the Spirit (the “Father in secret” of Jesus), or *Atman*, is no individual property of any man, but is the Divine essence which has no body, no form, which is imponderable, invisible and indivisible, that which does not *exist* and yet *is*, as the Buddhists say of Nirvana It only overshadows the mortal; that which enters into him and pervades the whole

body being only its omnipresent rays, or light, radiated through *Buddhi*, its vehicle and direct emanation.

[KT p. 101]

この考えによれば、*Buddhi* は光源体である *Atman* と不可分の *Atam*, つまり “the light of Wisdom” [Ibid., p. 102, n.] を相対界に放射遍満させる受動的な媒体であり、キリスト教の *God the Son* である *Christ* のように、絶対者と人間との橋わたしの役割をするものと考えられている。すなわち、*Atma* はその光としての役割をはたすためには、どうしてもこの媒体である *Buddhi* が必要であり、その作用面からみるならば、智慧の光である *Atma* は実は *Atma-Buddhi* のことにほかならないことになる。したがって *Buddhi* は本来は受動的であるが、*Atma* と合体することによって無規定、無属性の *Atman* を顕在化し、現実化して光としての性格を付与し、相対的存在である人間の絶対的な原理として、それを内在化する積極的な機能を所有していることになる。ただここで注意しなければならないのは、智慧の光としての *Atma-Buddhi* が人間の内在的な原理として実際に機能するためには、さらに具体化し、智能化して、個別化の原理である自我となんらかのかわりをもたなければならないということである。つまり “Spiritual Soul” である *Buddhi* は、さらに “Inner or Higher Ego” であり、mind-principle である *Manas* との合体によって、はじめて完全な精神的な機能を付与されるわけだ。ということは逆の視点からいうならば、ぼくたち人間は “Spiritual Ego” である *Buddhi-Manas* を通じて *Atma-Buddhi* の智慧の光にめざめ、徹底した修行によってその智慧を完成するとき、精神は *Buddhi* の境界に高められ、*Atma* の絶対の光明に満たされるということなのだ。

ところでブラヴァツキ女史は、キリスト教と神智教における救済の観念の相異に触れて――

it [i. e. Christianity] tells us of the *impossibility* of attaining Salvation without the aid of a miraculous Saviour, and therefore dooms to perdition

all those who will not accept the dogma. This is just the difference between Christian theology and Theosophy. The former enforces belief in the Descent of the Spiritual Ego into *lower Self*; the latter inculcates the necessity of endeavouring to elevate oneself to the Christos, or Buddhi state.

[Ibid., p. 155]

といっているが、この“the Christos, or Buddhi state”とはとりもなおさず、いま述べた精神的な境涯をさし、それはまた U の本文にある“the plane of buddhi”のこともである。しかも興味あることに、ここには、ぼくたちがつぎに問題にする Christos は、つまりは Buddhi のことにほかならないことが明示されているのだ。

ではブラヴァツキ女史のいう“Christos”はどのような意味に使われているのであろうか。学問的な正当性は別にして、しばらく女史自身の解説に耳を傾けることにしよう。女史はまず Chréstos から論じはじめる——

Chréstos (Gr.). The early Gnostic form of Christ.... The terms Christ and Christians, spelt originally *Chrést* and *Chréstians*, were borrowed from the Temple vocabulary of the Pagans. *Chréstos* meant in that vocabulary a disciple on probation, a candidate for hierophantship. When he had attained to this through initiation, long trials, and suffering, and had been “*anointed*” (*i. e.*, “rubbed with oil”, as were Initiates and even idols of the gods, as the last touch of ritualistic observance), his name was changed into *Christos*, the “purified” in esoteric or mystery language.

[TG pp. 83-4]

いまやぼくたちはこの説明から、“Christos”が“anointed”され、「浄められた者」を意味することを知った。実は U の本文に“the Christ”と

定冠詞がつけられているのもその意味からなのであって、例えば OED では “Christ” について——

The Messiah or ‘Lord’s Anointed’ whose advent was the subject of Jewish prophecy and expectation. (Only in versions of the N. T. and direct references to it; in the Geneva and 1611 versions often preceded by *the*.)

という説明が与えられている。

ところで、すでにぼくたちは Christos あるいは U の “the Christ” がけっきょく Buddhi の別名であり、それらはともに自我への執着を断ちきった清浄な絶対的な境地、つまり Nirvāna [涅槃] を意味することを知った。だが、困ったことにもう一方において、ブラヴァツキ女史は Christos がキリスト教の Trinity を包括する名称であるとともに、また神智教の “the immortal spiritual Triad”, すなわち Atma-Buddhi-Manas の総称でもあることを強調しているのである [Cf. “the term, “Christos,” which to us represents *Atma-Buddhi-Manas*” (KT p. 71)]. このような概念上の混乱は、おそらくすでに指摘した神智学そのものの性格に原因があるばかりでなく、それぞれの三者が不可分一体であることにも起因しているのであって、ここではその点について、これ以上深く詮索しないことにする。

さてぼくたちの考察によると、U の “the Christ” は神智学的な用法であった。だが、それに修飾句が付加されて “the Christ with the bridesister” ということになる、もはやこれは神智学の領域を離れ、純粹にキリスト教的な思想的背景を表わしているといわなければならない。すなわち “bridesister” という表現は、旧約聖書の “The Song of Solomon” [Douay Version では “Solomon’s Canticle of Canticles”] 第4歌の 9, 10, 12節にみられる同格の “my sister, my spouse” から来ている。

この呼びかけは “...love is represented in its purest form. The bride

is called 'sister-bride' and the union of the two loves is a spiritual one." [CCHS p. 501] ことを示すのであって、キリスト教では伝統的に、この愛をキリストが教会に対して与える愛情であると考えている。言葉を換えていうならば、“the bridesister”とは直接にはキリスト教教会、ひいてはキリスト教の信者たち [OAB p. 815], さらにはその信者の魂 [Ibid.] をさしているのである。

さてぼくたちは、U の “the Christ with the bridesister” という表現が、“the Christ” に神智教的な意味をもたせながらも、まったくキリスト教的なものであることを知った。ということは、これが eclectic な神智教の性格を揶揄するための意図的な表現であり、パロディであるということになる。だがそれは別にして、ぼくたちがすでに引用した、キリスト教と神智教との相異を述べたブラヴァツキ女史の言葉にもとづいて、この表現を神智教的に解釈するならば、“with” は “the Christ” と “the bridesister”, すなわち神智教徒の魂との一致、一体 [i. e. “at one with”] を示しているということもできよう。

つぎに問題になるのは “moisture of light, born of an ensouled virgin, repentant sophia” の個所である。これも “the Christ with the bridesister” と同様に神智教的な表現ではなく、むしろローマ・ミサ典礼の「使徒信経」の文句を下敷きに、神智教を茶化したものと考えられる。すなわち、洗礼式において参会者が洗礼場にはいるに先立って、司祭と godparents とによって唱えられる「使徒信経」文では、このような表現になっている――

Credo in Deum, Patrem omnipotentem, Creatorem caeli et terrae. Et in Jesum Christum, Filium ejus unicum, Dominum nostrum: qui conceptus est de Spiritu Sancto, natus ex Maria Virgine, passus sub Pontio Pilato, crucifixus, mortuus, et sepultus...[I believe in God the Father Almighty, Creator of heaven and earth; and in Jesus Christ his only Son our Lord, who was conceived by the Holy Ghost, born of the Virgin

Mary ; suffered under Pontius Pilate, was crucified, dead, and buried...]

[SR pp. 16 & 34]

もちろん上の引用文でアンダーラインをほどこしたのが問題の個所で、Uはあきらかにこれのパロディである。

ところで問題の“moisture of light”と“born of an ensouled virgin”という表現には、神智教でも、とくにそれに含まれる Occultism の思想的背景を示している。ではどのような思想がこれらの表現にこめられているかという点、 “moisture of light” についていえば、もしこの“moisture”を Us が教えるように “sperme” [p. 182] の意味にとるならば、とうぜん Occultism でいう “Germ” との関係がでてくることになる。すなわち “Germ” というのは、Occultism の cosmogony にあらわれる宇宙卵の胚体としての第1質料のことなのだ。そして “light” はぼくたちがすでに触れた Atma もそうであるが、Occultism においても、Atman に相当する “Ever Darkness” の根源的な生命の光ということになる。なお、詳しくはつぎのブラヴァツキ女史の解説をみられたい——

The Ray of the “Ever Darkness” becomes, as it is emitted, a ray of effulgent light or life, and flashes into the “Germ”—the point in the Mundane Egg represented by Matter in its abstract sense. But the term “Point” must not be understood as applying to any particular point in Space, for a germ exists in the centre of every atom, and these collectively form “the Germ”; or rather, as no atom can be made visible to our physical eye, the collectivity of these (if the term can be applied to something which is boundless and infinite) forms the noumenon of eternal and indestructible Matter.

[ASD p. 31]

つぎに “born of an ensouled virgin” の問題である。この個所は *Little Review* によれば “born of a virgin” [LR 5:12 p. 31] となっていて，“ensouled” は最終の段階において書き加えられたものであることがわかる。もちろんその意図は Virgin Mary の Holy Ghost による Immaculate Conception からの類推にあるが，Occultism でも第1質料である “the Immaculate Celestial Virgin” が “the Divine Thought” [=Logos] によって身ごもると考えられる。かくて天上界と地上界との誕生をむかえるのである——

The “Son” of the Immaculate Celestial Virgin (or the undifferentiated cosmic protyle, Matter in its infinitude) is born again on Earth as the Son of the terrestrial Eve——our mother Earth, and becomes Humanity as a total——past, present, and future——for Jehovah is both male and female. Above, the Son is the whole **Kosmos**; below, he is **Man-kind**.

[ASD p. 32]

さて、最後にぼくたちが問題にしなければならないのは “repentant sophia” である。まず “sophia” であるが、キリスト教ではパウロがキリストのことを “the wisdom of God” [1 Cor. 1:24] と呼んだことから，Santa Sophia [=Holy Wisdom] といえばキリストをさしている。前に引用したミサ典礼の「使徒信経」文の “suffered under Pontius Pilate” で言及されるキリストの苦難は、もちろん人類の救済者としての苦悩であり、人間の罪をあがなうための代償である。その意味では、キリストは God the Father の前に人類全体の罪を告白する罪人にほかならない。

だがここで問題になっているのは、このようなキリスト教的な Sophia ではなく、キリストの祖型であり、おなじく救済者としての役割をはたす Gnosticism の Sophia なのである [明大教養65 p. 52 参照]。なぜなら「究極的

存在と人間の本来的自己がその本質において一つであるという認識^{グノーシス}に救済を見出すという、救済的・自己認識のモチーフ」〔原キ p. 347〕がグノーシス主義の本質を形成しているからである。これはいまさら指摘するまでもないが、神智教とも共通する特色なのだ。しかも Sophia については、“In Gnostic thought, which saw in Wisdom a Divine emanation and a cause of the creation and redemption of the world, the conception played an important part, and was understood in the various systems as the spouse of the Logos, the mother of the Demiurge, &c.”〔ODCC p. 1471〕なのであって、例えば Simon Magus [=Simon the Magician] 伝承においては、父なるシモンが Logos である「究極的存在」であり、売春に憂き身をやつす、「究極的存在」の女性的属性、つまり子なる Ennoia [=Thought]-Sophia-Helene が「人間の本来的自己」に相当する。Sophia は告解による自己認識によって、父なるシモンの胸に帰ることができるのである。

なお、この項を終るにあたって付論として触れておきたいことがある。それは、ちょうど仏教において因分の般若 (prajñā) と果分の般若とが区別できるように、神智教においても因分の Buddhi と果分の Buddhi とが性格のうえから分けられるということである。因分とは、まだ結果〔悟り〕にいたらない原因〔修行的段階〕としての境地のことであり、果分とは結果としての悟りの境地のことであり、したがって因分の般若とは、煩惱に由来する無明の無知を根本から断ちきるための向上的な真理の智慧であり、また果分の般若とは、このように無明を滅ぼしてえた仏の覚りの智慧、つまり菩提 (bodhi) である。

もちろん、本来的にこれら二種類の般若があるわけではない。視点の相違によって般若に両面があらわれるだけである。同様なことが Buddhi についてもいえるのだ。まずブラヴァツキ女史が Buddhi と Mukti [i. e. vimukti (解脱)] との関係について述べたくだりをみてみよう――

Buddhi is the faculty of cognizing, the channel through which divine

knowledge reaches the “Ego,” the discernment of good and evil, “divine conscience” also; and “Spiritual Soul,” which is the vehicle of *Atma*. “When *Buddhi* absorbs our Egotism (destroys it) with all its *Vikaras* [i.e. transformations], *Avalokiteshvara* [i.e. Chinese: Kwan-yin; Japanese: Kwannon. “in esoteric philosophy Avaloki, the “on-looker”, is the Higher Self” (TG p. 44)] becomes manifested to us, and Nirvana, or *Mukti*, is reached,” *Mukti* being the same as Nirvana, i.e. freedom from the trammels of “*Maya*” or *illusion*.

[ASD pp. xxv-vi]

ここには *Buddhi* の機能として、ぼくたちがすでにみたサーンキヤ学派や『バガヴァッド・ギーター』の思想と、神智学独自の精神構造論とが混在している。だが、*Buddhi* を認識力、善悪の判断力、あるいは Egotism にもとづくあらゆる迷妄を断滅する絶対の智慧 [i. e. “divine conscience”] と見るか、また *Buddhi* は *Atma* の受動的な媒体で、絶対的な智慧を相対的な人間存在に内在化させ、具現化せしめる橋わたしとしての役割を担うと考えるかは別として、それらはいずれも *Buddhi* を因分の立場からとらえようとしているのだといわなければならないのだ。

これに対して U の “the plane of buddhi” は、すでに述べたように、Higher Self, つまり *Atma-Buddhi* としての *Avalokitesvara* を完成し、体得することによってえられる、*Atma* の絶対の智慧の光に満たされた境地、つまり果分としての *Buddhi* の境涯をさしているのである。

237.22/185.40 Mrs Cooper Oakley once glimpsed our very illustrious sister H. P. B's elemental.

まず問題になるのは “Mrs Cooper Oakley” である。だが結論からさきにいえば、この人物についてはわずかな手がかりしかなく、現在のところは、いぜん忘却のかなたにあるといわなければならない。

ソントンは彼女が神智教会 ダブリン 支部のメンバーであったという [AIU p. 156]。だがすでに触れたように、William Q. Judge の誤りと思われる “William J. Judge” なる人物もそのメンバーに加えられている [237.14 の注参照] ほどだから、彼の証言をそのまま鵜呑みにするわけにはいくまい。ただダブリン支部のメンバーであったかどうかは別としても、彼女が神智教会のメンバーであったことは事実のようである。

BMW や TM をみると、神智教会の幹部のひとりとして “A. J. Cooper-Oakley”, あるいは “Mr. Cooper-Oakley” の名が散見される [p. 41; pp. 177 ff.]。この人物は一時はブラヴァツキ女史の信頼もあつく、とくに懇望されて、元来は女史の個人誌であった *The Theosophist* [1879年10月発刊の月刊誌。現在も継続] の Managing Editor になり、事実上の編集の実権を握っていたほどである。もっとも、その後1887年に、人間を構成する根本要素の數をめぐって、バラモンに属し、また神智教会の有力なメンバーでもあった T. Subba Row と女史との間に論争がもちあがったとき、彼は女史の逆鱗にふれて、ロウとともに教会を脱退せざるをえなくなった [TM pp. 177 ff.]。

さてこの人物の名前であるが、“Cooper-Oakley” というのは欧米によくある compound name であって、通例 Cooper が妻方の、Oakley が夫方の姓を示している。そういえば TM には、1884年の記述に “Oakley” という人物への言及があり [p.142], また BMW には、1882年の記述に “Mr and Mrs Oakley” の名がみえる [p.18]。ということは、問題の “Mrs Cooper Oakley” は旧姓を Cooper といい、彼女は夫とともに神智教会のメンバーであったという推定が成りたつことになる。しかも彼女の夫はかなり有力なメンバーであったのだ。

では神智教会の関係者に Cooper という姓の女性がいなかったかという、興味あることに、Laura Cooper という人物が記録に残っている。彼女は1891年5月8日にブラヴァツキ女史が死亡したとき、Claude Falls Wright [明大教養46 p.93 参照] らとともにその最後を見とった人物であったのだ [TM

p. 158]。ブラヴァツキ女史に対するライトの熱狂ぶりや、女史の臨終を見まもった人物がごく少数であったことを考えると、この女性は女史の側近か、あるいはよほど信頼されていた人物であると結論せざるをえない。ただ問題は、もしこの人物が“Mrs Cooper Oakley”と同一人物だとするならば、なぜ彼女は旧姓で記録されているのか、ということである。この点に関しては、①彼女はブラヴァツキ女史に対する忠誠をつらぬくために、女史を裏切った夫と離別して旧姓にもどった、② A. J. Cooper-Oakley に関連してみられたように、JM や BMW の記述はかならずしも精確ではなく、この場合も“Cooper-Oakley”とすべきところを“Cooper”と書いてしまった、のふたつの理由が考えられる。もっともこれらふたつのうち、ブラヴァツキ女史の激しい性格と妻の行動に対する夫の反対を考えると、どうやら①の方が有力な理由だといわなければならないが。

つぎにぼくたちが問題として採りあげなければならないのは、Mrs Cooper Oakley がいま見たという H. P. B., つまり Helena Petrovna Blavatsky [237.15 の注参照] の“elemental”とはなにかということである。

ふつう神智学では“Elementals”というと、“spirits of the Elements” [TG p. 111], つまり地、風、火、水の四大に住む精、“Gnomes (of the earth), Sylphs (of the air), Salamanders (of the fire), and Undines (of the water)” [Ibid., p. 112] のことをさし、SOED でも、その用例としてまず第1に、ブラヴァツキ女史の *Isis Unveiled* (1877) からの引用が掲げられている。だが、本文の context から判断するかぎりでは、ここではこの意味でないことは明らかである。むしろ、婦人がひと眼をはばかる、なにかあられもない姿でなければならない。そこで EO をみてみると、さいわいづぎのような記述にぶつかる――

The Theosophists use the word “elemental”...to denote the “astral remains” of one who has lived an evil life on earth, and who is loath to leave the scene of his pleasures.

U の本文はこの用法であることはほぼ間違いないが、それにしても “astral remains” とはなにをさすのか、いま一步明確な説明がほしいところである。そこでブラヴァツキ女史の著書にあれこれあたって結果、 “astral remains” とは “the *Kamalokic* “shells” of the vanished *personalities* that were” [KT p. 28] という答が返ってきた。しかし、これでは神智学に不案内な者にはかえってわかりにくい。そこでさらに女史自身にご登場を願って、この説明の説明をおこなってもらうことにする。

まず “Kamalokic” であるが、これは “Kamaloka” から出た語で、女史はそれを説明してこういっている——

Kamaloka (Sk.). The *semi*-material plane, to us subjective and invisible, where the disembodied “personalities,” the astral forms, called *Kamarupa* remain, until they fade out from it by the complete exhaustion of the effects of the mental impulses that created these eidolons of human and animal passions and desires.

[TG pp. 171-2]

この説明で、 “astral remains” とはどうやら “Kamarupa” のことだということがわかるであろう。そしてさらに、 “Kamarupa [i. e. Kāma=愛慾+rūpa=物質, 「色」]” に対して与えられた女史の説明によると、 “it is the subjective form created through the mental and physical desires and thoughts in connection with things of matter, by all sentient beings, a form which survives the death of their bodies” [Ibid. p. 172] とあるから、けっきょく “elemental” とは、その物質に対する執着のために、死後も昇華されずに幽界に残滓ないしは形骸 [i. e. “shell”] としてとどこおる愛慾の物質であるということになる。ただ上の説明では、 “elemental” は死後のみに起る現象のようであるが、すでに幽界に関して見たように[237. 15 の注参照]、超能力者は幽界を自由に活動することができるのであるか

ら、愛慾的な妄執にとらわれるときには“elemental”のような幽体としての現象もあらわれ、また“Mrs Cooper Oakley”のような霊能者の眼には、普通には見えないそのような現象が知覚されるのであろう。

× × × × × ×

〈お ことわり〉

これは**明大教養 65** に発表された論文の続篇である。ただ前の論文は最後の項目の途中で終わってしまい、「未完」の字のみがむなしく残されている。筆者としては、いつまでもこのままに放置しておくのに忍びないのはもちろんである。だが、その後も努力はしてみたが、はかばかしい成果がえられないまま今日にいった。

正直のところ、筆者には A. E. の神秘主義の体系が的確につかめないのである。8分どおりはつかめているつもりだが、あとの2分がどうしても埋まらないのだ。では、なぜ彼の体系がこんなに把握しにくいかというと、その最大の理由は、彼が根っからの mystic で、また visionary であるからである。彼においては感覚的な宗教体験が先行し、しかもそれがきわめて主観的、自己陶醉的で、さまざまな思想的な断片をそのままに利用することはあっても、それはもっぱら自己の神秘的体験を正当化し、権威づけるためのものなのだ。つまり、A. E. には他の思想体系との対決を通じて自己の体験を客観化し、体系化する論理性に欠けるところがあるのである。これでは A. E. の思想体系を把握するといっても雲をつかむようなもので、徒勞に終るのは必定である。

ところで、U の A. E. の神秘思想に関する個所と、本稿でとり扱った神智教に関する個所とを比較するならば、前者のほうがはるかに明確で、よく整理されているのに気づくはずである。また前者について、LR 5:12 の“Formless spiritual. Father, Son and Holy Breath. This verily is that. I am the fire upon the altar. I am the sacrificial butter.”と、最終稿の“Formless spiritual. Father, Word and Holy Breath. Allfather, the heavenly man. Hiesos Kristos, magician of the beautiful, the Logos who suffers in us at

every moment. This verily is that. I am the fire upon the altar. I am the sacrificial butter” とを比較してみるならば、前者に加えられた大規模な補整と格段の充実に眼をみはらざるをえないであろう。だがこれら一連の事実は、あながち作者ジョイスの A. E. に対する関心の深さと、それに起因するペンのさえを示すとばかりはいえないのだ。なぜなら、ジョイスは明らかに A. E. が呈示した自己の思想体系の構造式を下敷きとして使っているからである。ジョイスは U を *Little Review* に発表してから決定稿をうるまでの短時日のあいだに、問題の下敷きを手に入れたに相違ないのである。

だが、もちろんこのような指摘をしたからといって、それですべてが終りというわけではない。その構造式の解説、それこそが問題の鍵をにぎるすべてなのだ。しかも U の本文の解説は、さらにそのつぎの課題としていぜん残されている。だが、構造式の入手はすくなくとも A. E. の身長を計測する足台にはなるのであって、あとは精密なメジャーの作製とその適用が待たれるだけである。その日がいつくるか、予測はできないが、そう遠くないことを付言して、おわびの言葉にかえさせていただく。